



日本待望の「金」！野田和弘選手（広島学院高） ほか3選手も「銀」・過去最高の成績

インドネシアで9月に開催された第4回国際地学オリンピックで、野田和弘選手が日本代表としてはじめて金メダルを獲得。大西泰地、川島崇志、武内健大の各選手も銀メダルを獲得。4名全員が銀メダルだった前回台湾大会の成績を上回った。派遣選手全員のメダル獲得は日本の参戦以来3年連続。

第4回大会となった国際地学オリンピック (IESO) インドネシア大会は、同国のジョグジャカルタ周辺で9月19日から28日にかけて開催され、17の国と地域から63名の高校生が参加。地質・固体地球科学部門、気象・海洋科学部門、天体・惑星科学部門の3部門の筆記試験と実技試験に臨んだ。

今大会で授与されたメダルの総数は、金7、銀14、銅26。日本以外の金は、台湾(3名)、韓国(2名)、インドネシア(1名)が獲得した。部門賞としては天文・惑星科学部門のトップ賞を野田選手が受賞。このほか2部門を押さえた台湾の独占に待ったをかける形で、日本の存在感をアピールした。



表彰式後の選手とメンター（左から田中博メンター、武内健大、川島崇志、大西泰地、野田和弘の各選手、右端に杉憲子メンター）

.....

文部科学大臣を表敬

日本開催への協力求める

日本選手団は帰国した9月29日、空港から直接、東京霞ヶ関の文部科学省を訪れ、高木義明文部科学大臣を表敬。今



回は好成績を収めた4人全員には大臣から文部科学大臣賞が直接手渡された。

大臣室には鈴木寛副大臣と林久美子政務官も同席。日本選手団に合流した濱野洋三当会理事長らと約15分間にわたって懇談した。懇談の中で濱野理事長は国際地学オリンピックの概要や、日本の取り組みを説明。2012年国際地学オリンピック日本大会を含む地学オリンピックへの今後の協力を要望した。また、大臣らは日本選手とも懇談。選手高木文部科学相らと日本代表4選手(文部科学大臣室にて)

は現地での体験や地学オリンピックに参加して得たものなどについて大臣らに説明した。大臣は「この経験を将来に生かして欲しい」と生徒を激励した。

地学オリンピック選手団が文部科学大臣と面会したのは今回がはじめて。今回の好成績は、地学オリンピックが科学オリンピックの一つとして国内でさらに広く認知されるきっかけを作った格好になった。

【今号の誌面】日本 IESO スピリット賞受賞。順調に増加する参加国数。インドネシア大会の様子(以上、2面)。日本代表選手の感想(3面)。オブザーバーの感想。リレーエッセイ(4面)。

日本、IESO スピリット賞も 問題作成などに建設的貢献との高い評価

今回、日本チームに主催者から、IESO スピリット賞 (Ksatria 賞) が授与された。主催者の説明では、開催国が提案した試験問題のたたき台に対し、建設的な改訂意見を数多く発言し、適正な問題の作成に最も貢献した国は日本であつた。

たとの評価がこの賞に繋がったとのことであつた。

国際地学オリンピックでは、出題される問題が開催国により用意され、各国はこの内容と水準を査定し、難しすぎれば解答にたどり着けるような資料や説明文

を加筆させ、簡単過ぎれば問題そのものを予備問題と差し替えさせるという議論を行う。この作業を行うのは各国のメンターである。

今回、日本からメンター・国際審判員として実務にあたった田中博氏（筑波大学教授）は「大会の主役は参加した生徒達であるが、派遣団の総力としての今回の受賞は大変喜ばしい」と語っている。

参加国数は順調に増加

開催国の負担軽減も議論に

今大会の参加国は、カンボジア、インド、インドネシア、イタリア、日本、韓国、モルジブ、ネパール、フィリピン、クウェート、ルーマニア、ロシア、スリランカ、台湾、タイ、ウクライナ、アメリカの17カ国で、昨年より3ヶ国増加した。うち、初参加はモルジブ、クウェート、ルーマニア、ロシア、ウクライナの5カ国。このほかに、フランスが昨年引き続きオブザーバーのみ参加した。

これまで、国際地学オリンピック (IESO) の大会は、韓国、フィリピン、台湾、インドネシアとアジアのみで開催されてきたが、来年はイタリアがホストとなり、同国のモデナで開催することが決定している。イタリア開催により、ヨーロッパ各国も参加しやすくなることから、地学オリンピック運動がヨーロッパにも広がるとみられる。この結果として、国際的な認知がこれまで以上になるのは必至と見られる。

一方で、参加国の増加により、開催国の負担が大きくなりつつあるのも事実。今大会期間中、協力態勢の強化を図り、より良い運営を目指すために各国のメンターが盛んに議論を行ったが、具体的な反映は今後の課題として残っている。

日本は2012年のホスト国となり、つくば市で大会を開催することが決まっている。地球科学の水準が高く、層も厚い一方、物価高で、資源関連の企業が少ない日本での開催は課題も大きく、広いサポート態勢が必要となっている。



地元高校生から、環境活動に関する取り組みの説明を受ける日本代表選手たち

盛りだくさんだったインドネシア大会

ITFT は鍾乳洞で。地元高校生との交流、ボロブドゥール見学も

国際地学オリンピック (IESO) は、メダルを争う競争の場であるが、同時に世界から集まった高校生たちが交流を深める機会ともなっている。IESO では、第1回大会以来、国際協力野外調査 (ITFI) という作業が選手たちに課される。これは、メンバーの出身国が重複しないよう工夫された班をつくり、課題をこなすことで、国際協調の体験をさせるという試み。

今年は選手6~8名ずつが10班に分かれて、25日の午前9時頃からプリビン鍾乳洞 (Bribin Cave) で調査を行った。調査は、洞窟内で pH や水質、地下の川の流量など、水文学的なデータの収集を行うとともに、カルスト地形の観察をして、あらかじめ与えられた8つの質問の答えを協力しながらまとめ上げた。

調査の結果はチームごとに議論して、一つのプレゼンテーションにまとめ上げ、翌日の午後、英語を駆使して発表した。各班の発表は各国のメンターによって評価され、Best Cooperation Team と

Best Presentation Team がそれぞれ表彰された。

残念ながら日本選手はそのどちらにも含まれなかったが、彼らが積極的に意見交換する様子うかがえた。今回も ITFI が参加者全てにとって国を越えた交流を深める貴重な機会となったことは、日本代表選手の感想 (次頁) から伺われる。

また、各国の選手はジョグジャカルタ市内の高校を訪れ、環境活動への取り組みなどに関する高校生の発表に耳を傾けるとともに、盛んに意見交換をして交流を深めた。

主催者は、地元高校生による民族舞踊の演舞、世界遺産で8世紀頃に建設された巨大仏教遺跡であるボロブドゥールの見学なども用意。各国選手にとってインドネシアの文化を学び実感する良い機会となった。

最終日の夜7時からは、ホテルでフェアウェルパーティーが開催され、会場は交流を深めた選手たちの一体感に包まれた。

選手たちが得たもの 最高のチームが、最高の体験を語る

各国に個性・日本の個性

「各国に個性がある」。それは随所で浮き彫りになった。例えば、国際チームによる研究発表でのこと。打ち合わせが始まった途端、各々が勝手な行動を始めた。パソコンに向う人、考察する人、中には遊ぶ人や部屋に戻って寝てしまう人もいた。うまく作業の振り分けができず、「世界が一つになるのは難しいのか」と思ってしまった。しかし、最後の行事であるお別れパーティーでは、各国の踊りを通じて、少しずつまとまりが生まれていた。やはり同じ人間じゃないか、そう思えて嬉しくなった。

そのような世界の人々との交流を通じて、僕の中で日本人の良さが見えてきた。それは、聖徳太子の「和を以て貴しと為す」に集約されていると思う。日本人は「和」を重んじる。時間厳守、気配り、誠実さ、これは世界に誇れる精神だと痛感した。これに気付けたことは試験の結果云々より遥かに大きいと思う。閉会式で日本の精神を表彰され、世界に認められたことが何より嬉しかった。

野田和弘選手

(広島学院高等学校3年)

参加することで感じた意義

IESOの約二週間は自分が過ごしてきたなかでも最高の二週間であるように思います。たとえば、ITFTでは全く日本語の通用しない他国の選手とチームを組み、共に調査をしてプレゼンを作り発表するといったまたと無い経験をしました。地学に関する知識はもちろんのこと、彼らは母国語でもない英語をネイティブと同等に使い、驚くべき速さで質の高いプレゼンを作り上げていました。ただそれを黙って見ていることしかできなかった自分の未熟さを痛感しました。

もちろん苦い思い出ばかりではなく、

他国の選手と一緒に食事をしたり、ゲームをしたりと二週間本当に楽しく過ごすことができました。彼らとは帰国してからもfacebookを使ってほぼ毎日のように楽しい交流しています。

「オリンピックは参加することに意義がある」と言われますが、地学オリンピックについてはそのとおりだと思います。「自分が知らなかった国の人と寝食を共にし、彼らの世界観を垣間見る。そしてインプットしつつも今度は彼らに対しアウトプットをする」というだけのことで、いつの間にか自分の観点が変わっているのです。本当に素晴らしい機会でした。

大西泰地選手

(白陵高等学校2年)

広く学ぶ必要を痛感

IESOへの参加は、自分にとって初めての海外経験、国際交流の場でした。試験の期間中は最後まで諦めずに問題に取り組めたと思います。しかし、試験初日の筆記試験で緊張と焦りから頭の中が真っ白になってしまい、試験終了後、結果が発表されるまでは銅メダルも無理なのでは、というどうしようもない不安に駆られました。そんな時、他のメンバーとお互励ましあって次の試験へ向けた自信を取り戻せたことは、銀メダルを獲得できた大きな要因で、3人には本当に感謝しています。

試験以外ではITFTなどの国際交流やジョグジャカルタ周辺の観光などがあり、忙しい日程でしたが楽しむことができました。ただ、各国のメンバーとの話し合いの際、自分の英語力が劣っていたため自分の意見を上手く伝えられず、本当に悔しい思いをしました。また筆記、実技試験では化学や物理、数学の統計処理などのセンスも必要であり、世界の選手たちとの交流や観光をより一層楽しむためには、歴史や地理、世界情勢などを

幅広く学ぶことが大切であると痛感しました。

銀メダル獲得を含め、自分にとって非常に大きな収穫のある大会でした。

川島崇志選手

(静岡県立磐田南高等学校3年)

視野を広げてくれた大会

試験は昨年までのものとは打って変わって計算重視になっていた。計算が苦手な僕にとってはまさに天敵のような試験で、終わった後の気分は最悪であった。

そんなとき、日本のメンバーだけでなく海外の友人も励ましてくれて、僕はとても気が楽になったのを覚えている。今回の大会で僕はかけがえのない友人達をたくさん作ることができた。ITFIのメンバーとは特に仲良くなれたのではないと思う。

彼らは皆、英語が流暢だった。それこそ僕らが一番下手なのでは？と思えるほどだった。彼らには英語を進んで話そうという度胸があった。僕もそんな雰囲気から取り残されないように、人に会ったらまず挨拶をするように心がけた。やったことは非常に簡単なことだったが、これだけでも僕の交流の幅はかなり広がったと思う。

相手の話を聞いていると、日本ではかなり質の良い地学教育をしていることが分かる。資料集を見せると「字は読めないけど、こんなに見やすく飽きない物は自分は持っていない」という答えがほとんどであった。これで日本では地学教育が主に文系にしかされていないと言ったらどんな顔をしたらだろうか。理系の受験教科に「地学」の2文字が増えることを切に願うばかりである。

今回の大会を通じて、自分の視野が広がったと思う。こんなに楽しいのだったら、海外留学も悪くないかもと最近も考えている。

武内健大選手

(聖光学院高等学校3年)

第4回国際地学オリンピックに参加して

—今回の成果と今後の課題—

渡来 めぐみ

(日本選手団オブザーバー・茗溪学園高等学校)

地学オリンピックと自分との関わりといえば、日本で初めての国内予選のときに、当時の勤務校で参加者を募り、試験監督をした程度であった。それでもその当時、他の科目と同様、地学を通して高校生が世界と接する機会の到来に気分が高揚したことを今も鮮明に覚えている。それから2年後、インドネシアで開催される第4回国際地学オリンピックにオブザーバーとして参加することになった。

オブザーバーに求められるのは、おもに体力・英語問題の翻訳・引率する生徒の指導・英会話力である。出発までの準備は、日本代表役員として毎回国際地学オリンピックに参加されている先生方から大会に関する説明をうかがうことから始まった。次に、英語問題の翻訳に備え、第1回～第3回の国際地学オリンピックの問題や日本地学オリンピックの問題に挑戦し、英語問題と日本語に訳された問題を見比べたりした。さらに、8月中旬には日本代表選手の合宿研修に参加した。そこでは代表選手との交流だけでなく、高校教員、研究

者や大学の先生方と親睦を深めることもできた。

このように出発前から、地学好きな生徒や地学教育関係者との多くの出会いがあったが、国際大会の会場では世界各国の人々とさらに有意義な日々を送ることができた。中でも、国・地域の代表である高校生たちがメダル獲得を真剣に目指しながらも、地学が好きな仲間たちとの時間を楽しむ姿に強く感銘を受けた。また、各国の代表役員のほとんどが大学や政府関係者かもしれないとの予想に反し、18カ国(オブザーバー参加のみのフランスも含む)中8カ国では高校教員が含まれていた。立ち話や休憩中の雑談では、学習指導要領に関する話がでえたり、フランスの教科書を見せてもらったりと、世界各国の教育事情を垣間見ることもできた。

今回の参加は代表選手の鋭気に感化され、自分自身を顧みる良い機会となった。当初は、代表選手のサポート役として努めようという気持ちで臨んだものの、問題作成の議論や翻訳作業によって常に睡眠不足の状態が続き、オブザーバーの資質の一つに体力が挙げられる意味を痛感した。今後はこの貴重な経験をより多くの方々に還元していきたい。

最後に、現地でお世話になったインドネシアのスタッフをはじめ、日本チームの皆様、このような機会を与えてくださった地学オリンピック関係者の方々に感謝いたします。

Chiorin! リレーエッセイ no. 5

空はどこから？

藤崎慎吾



中学か高校のころ、何かの雑誌あるいはラジオ番組で、こんな話を知った——ジョン・レノンの妻だったオノ・ヨーコが、ある人に「ねえ、空はどこから始まると思う？」と聞いた。首を傾げた相手に彼女は「足下からなのよ」と答えたそうだ(地学的にも正しい気がする)。問いかけの意図を理解できたかどうかはともかく、僕はけっこう「へえ」と思った。

それからしばらくして「じゃあ宇宙空間はどこから始まるんだろう」と考えた。地表から100kmを超える地点という定義はあるようだが、むしろ便宜的なものに過ぎない。やはり突き詰めていけば、自分の足下から、あるいは足下よりもっと下の、地球の中心からじゃないか。そう考えるようになって、僕は地上に住んでいるというより、宇宙に暮らしている

という感覚を抱くようになった。

地学も、そういうオノ・ヨーコの問いかけみたいな学問じゃないかと想像している。当たり前すぎて、普段は思いつきもしない疑問に答えること——それは往々にして「あの山や海は、なぜそこにあるのか」とか「地球はどうやってできたのか」といった、巨大な空間や時間のスケールを扱うことになる。すごく大変そう。実際、かの平朝彦先生にインタビューしたとき「悠久の時間を考えれば考えるほど現実との乖離が激しくなって、かえってせこせこしてしまう。地質学者に酒飲みが多いのは、そういう状況から逃れるためだ」などとおっしゃっていた。

僕の本もスケールの大きさを売りにしているが、少々風呂敷を広げすぎるせいか、あまり読んでもらえない。でも日常のせこ

せこした話より楽しいと思うから、酒の力も借りつつ、めげずに書くつもりだ。皆さんも飲み過ぎには注意して、どんどん新しい発見をしていってください。

ふじさきしんご。SF作家。ノンフィクションライター。1962年東京都生まれ。科学雑誌編集者、映像ソフトプロデューサーのかたわら1995年に執筆した「レフト・アローン」日本SF大会でファンジン大賞(創作部門)を受賞。1999年「クリスタルサイレンス」がベストSF(国内編)第一位。近著に「ストーンエイジCITY アダム再誕」、「祈望」など。

地学オリンピック日本委員会ニュースレター
Chiorin! (no.5)
平成22年12月1日発行
発行人: 特定非営利活動法人
地学オリンピック日本委員会広報委員会
編集長: 萬年一剛(広報副委員長・南フロリダ大)
印刷所: ㈱あしがら印刷
〒113-0032
東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル4F
日本地球惑星科学連合事務局気付(事務局長・瀧上)